

2024年度哲学の実験グループ
卒業論文口頭試問

カント『判断力批判』における 人間性と時間

—「美感的判断力の批判」における構想力の作用の分析を通じて—

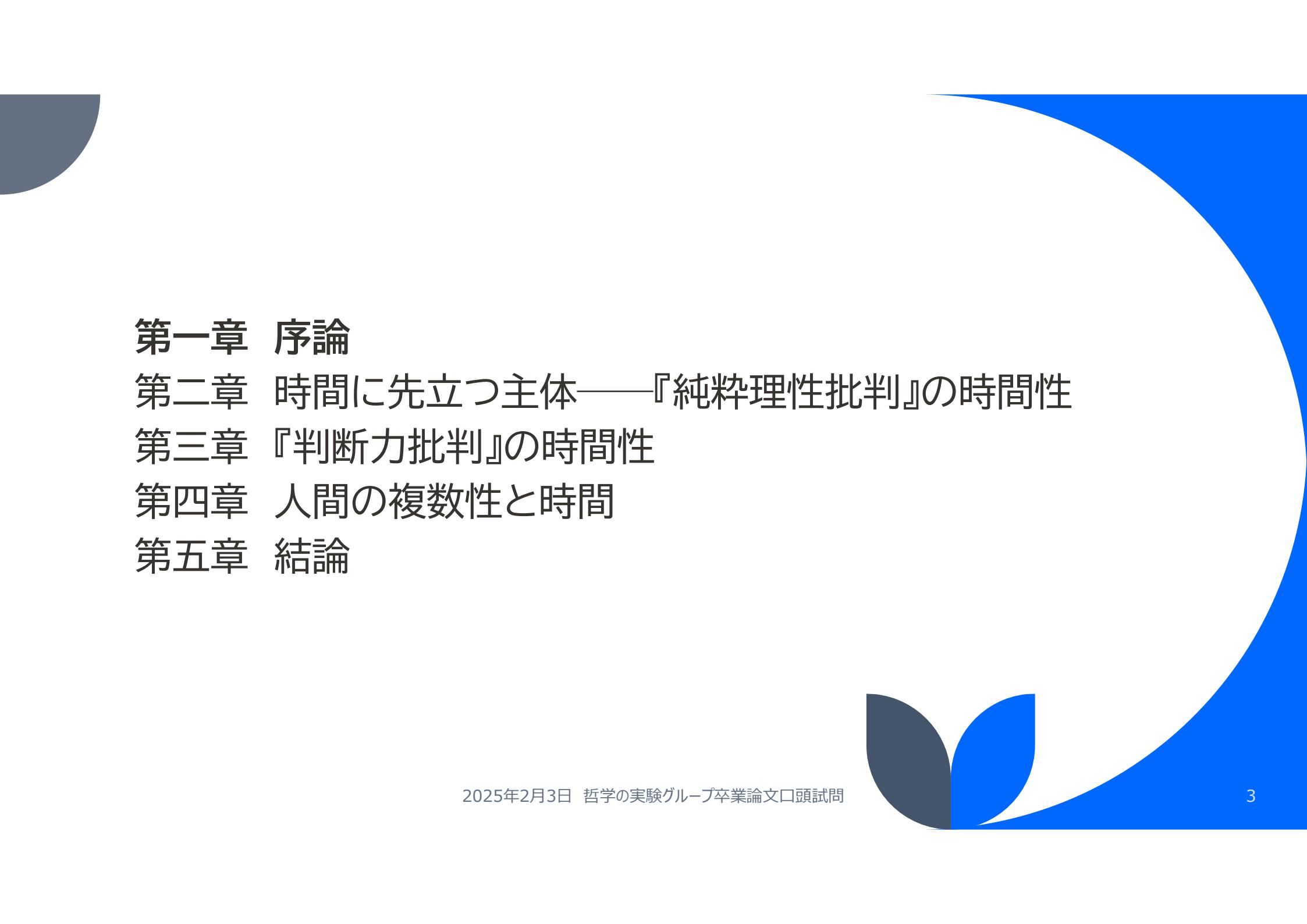
大阪大学人間科学部四年 葛西李成
(比較文明学)

凡例

[KrV]……『純粹理性批判』[Kritik der reinen Vernunft](1781/1787)
[KpV]……『実践理性批判』[Kritik der praktischen Vernunft](1788)
[KU]……『判断力批判』[Kritik der Urteilskraft](1789)
[VA]……『実用的見地における人間学』[Anthropologie in pragmatischen Hinsicht](1798)

*訳文は岩波書店『カント全集』から引用した。ただし、訳語・表記は適宜変更している。

*引用の頁数はアカデミー版全集[Kant's gesammelte Schriften. Herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften.]に従った。

- 
- 第一章 序論**
 - 第二章 時間に先立つ主体——『純粹理性批判』の時間性**
 - 第三章 『判断力批判』の時間性**
 - 第四章 人間の複数性と時間**
 - 第五章 結論**

第一章 序論

- ・ハイデッガー『存在と時間』
 - 時間を無限的な「今の系列」と考える「通俗的時間概念」は、死からの逃亡=人間の有限性の見落としと結びついてきた

通俗的な現存在了解が世間の指揮をうけるようになると、公開的時間の《無限性》という自己忘却的な《観念》は、いよいよ牢固たるものになるのである。世間は決して死ぬことがない。なぜなら、死というのは各自のものであり、本来的には先駆的覚悟性においてはじめて実存的に了解されるのであるから、世間は死ぬことができないのである。(……)それにもかかわらず、世間は死へ臨んでの逃亡に特徴的な解釈を与える。終末までは《まだまだ時間がある》、というのが、それである。ここに表現されている《時間がある》は、消費しうるという意味のもので、《いまのところまだとにかくこれを、それからあれを、そしてせめてあれだけでも、そしてそのあとでいつか……》ということなのである。これでは、有限性が了解されるどころではない。[ハイデッガー、2022(下):402]

→人間の有限性に根差した根源的時間を思考(『存在と時間』『カントと形而上学の問題』)

第一章 序論

- だが有限性と時間の連関は別様に考えられるべき(二章で後述)
→この課題にカント『判断力批判』の読解で応える
- なぜ『判断力批判』か
 1. 感性的諸能力の体系化による「人間学」の成立(カッシーラー『啓蒙主義の哲学』)
 2. 人間の複数性への着目(アーレント『カント政治哲学の講義』)
 3. 構想力と時間の連関(那須政玄『闇への論理』など)

- 第一章 序論
- 第二章 時間に先立つ主体——『純粹理性批判』の時間性
- 第三章 『判断力批判』の時間性
- 第四章 人間の複数性と時間
- 第五章 結論

第二章 時間に先立つ主体——『純粹理性批判』の時間性

- 内的感官の二重性
 - 「われわれの内的状態」(客観的に構成された内的現象)と、「われわれ自身」(超越論的統覚に結びついた意識の流れ)の二重性

「時間は内的感官の形式、すなわち、われわれ自身とわれわれの内的状態の直観の形式に他ならない」[KrV:A33, B50]

→「われわれ自身」の直観(自己触発)はいかにして起こるか？

第二章 時間に先立つ主体——『純粹理性批判』の時間性

• 自己触発は多様の直観に随伴する

- 知的直観が不可能な人間は、直観に先立って統覚(や感性の形式)を得ることができない
- 感性が悟性を触発する

自己自身の意識(統覚)は自我の単純な表象である。もしその意識によってのみすべての多様が主觀のうちに自己活動的に与えられているならば、内的直観は知性的であろう。人間においては、この意識は主觀のうちにあらかじめ与えられる多様の内的知覚を必要とする。そして、この多様が自発性なしに心性のうちに与えられる仕方は、この違いのゆえに、感性と呼ばれねばならない。[KrV:B68]

直観の形式は、或るもののが心性のうちに定立される以外には何ものも表示しないので、心性が自らの活動性によって、すなわち自らの表象のこの定立作用によって、したがって自己自身によって触発される仕方、言い換えれば、形式上は内的感官以外の何ものでもありえない。[KrV:B67]

第二章 時間に先立つ主体——『純粹理性批判』の時間性

- ・ このような議論はロック的な経験論なのでは？（超越論的統覚・直観の形式に先立つ無規定な表象を前提している）
→ そうではない
 - カントは悟性による感性の触発としても自己触発を考えている

悟性がそれ自身で単独に考察される場合、悟性の総合は、悟性が感性なしにもそのようなものとして意識している働きの統一に他ならない。しかしこの働きによって、悟性それ自身は感性を内的に、感性の直観形式に従って悟性に与えられるであろう多様に関して規定することができる。それゆえ、悟性は、構想力の超越論的総合の名のもとに、その能力が悟性である受動的主觀に対する働き——それについて内
的感官がそれによって触発される、とわれわれが正当にも言っている働き——を行使するのである。

[KrV:B153]

第二章 時間に先立つ主体——『純粹理性批判』の時間性

- ・ カントには「感性と悟性の円環」がある
 - この円環的な時間性が「主体に先立つ表象」という考えを無効にする
- ・ ハイデッガー『カントと形而上学の問題』 | カントの「根源的時間」とは円環的な構造

時間はその本質上、自己自身の純粹触発である。いな、それに止まらず、時間はまさに、一般に「自己から出て……を目ざして」というようなことを形成する当のものであり、しかもこのようにして形成される目ざされたものが先に述べた……を目ざすことへ立ち返って見入るという仕方でそれを形成する。[ハイデッガー、1976:205]

第二章 時間に先立つ主体——『純粹理性批判』の時間性

・問題点

1. 「感性と悟性の共通の根」としての構想力という想定

→感性と悟性の制約を受けない無限な能力として構想力を捉えることで、人間の無限性を想定してしまっている

2. 円環構造としての根源的時間という想定

→近代以降の西洋の定型発達的な主体でのみ成立する限定的構造に過ぎない[野尻、2022:80]

・以降の課題

1. 他能力との関係の中で構想力による時間形成を考える(三章)

2. その上で、近代西洋型社会の枠組みから逸脱した時間性を考える(四章)

- 第一章 序論**
- 第二章 時間に先立つ主体——『純粹理性批判』の時間性**
- 第三章 『判断力批判』の時間性**
- 第四章 人間の複数性と時間**
- 第五章 結論**

第三章 『判断力批判』の時間性

- ・『判断力批判』における「戯れ」

趣味判断における表象の仕方の主観的な普遍的伝達可能性は、規定された概念を前提せず生じるべきであるから、構想力と悟性の自由な戯れ（認識一般のために必要とされるように、この二つの能力が相互に合致するかぎり）における心の状態以外ではありえない。[KU:218]

- ・「戯れ」
 - 美的体験の中核にあるプロセス
 - 悟性と構想力によって担われ、美の普遍性を担保する

→これはどのようなプロセスなのか？

第三章 『判断力批判』の時間性

- カントはこれを詳述しない
 - なぜ悟性と構想力が自由に動きつつ協働的に一致するのかが理解できない

- **本稿の解釈** | 「戯れ」とは「構想力と悟性の時差」である
 - 構想力が自由に表象を享受→遅れて活動を始めた悟性がそれを包摶し、「認識一般」の枠組みへと昇華
 - 構想力に対する悟性の遅れは、知的直観の不可能性に由来する
 - Cf. Dieter Henlich “Aesthetic Judgment and the Moral Image of the World”.

第三章 『判断力批判』の時間性

- ・ 芸術の快は「時差」の継続時間によって考えられる

造形芸術は持続的な印象を与え、音楽は一時的な印象だけを与える。構想力は、造形芸術の諸印象を呼び戻し、これらを快適に楽しむことができる [sich damit angenehm unterhalten]。しかし、音楽の諸印象は、すっかり消滅するか、それとも心ならずも構想力によって反復される場合には、われわれにとって快適であるよりも、むしろ煩わしいものとなる。[KU:330]

- 構想力は「持続的な印象」のもとに滞留し享受する
→これは自己触発的(sich damit angenehm unterhalten = “自らを快感でもてなす”)
- だがこの快は、悟性の介入によって単なる快ではない美へと昇華される

第三章 『判断力批判』の時間性

- ・ 崇高論 | 「構想力の暴力」
 - 構想力は捕捉された表象から時間条件を廃棄することで個々の表象を背進し、一つの表象に総括していく
→ 構想力は持続的な印象を作り出す
- ・ 『判断力批判』における構想力
「構想力の暴力」 | 構想力が持続を作り出す
「戯れ」 | 構想力が自ら作り出した持続を享受する
→ 悟性がそれを中断し昇華する

第三章 『判断力批判』の時間性

- この持続と中断のリズムが、日常の時間性を形成する
 - Cf. カント『人間学』の退屈論 | 「我々が生きている時間点」の進む速度は、それぞれの瞬間が与える快によって異なって感じられる
 - 例えば一マイル歩くときの道のりは、首都に近づけば近づくほど短く感じられる

これはどうしてかといえば、目に入る対象が豊富だと（首都近郊の村落や別荘など）、回想するときに相当長い距離を経過してきたはずだと錯覚して推論し、したがってまたそれに要した時間を実際より長めに推測することになるからである。反対にあとの場合のように風物が乏しいと、目にしたもののが記憶がほとんど残らず、そのため実際の道のりよりも短く、したがって時間も時計で測るより短く推論してしまうのである。[VA:234]

- 記憶し、回想する力としての構想力が働いている
- 構想力の持続に没頭することで、過ぎた時間は実際より短く感じられる

- 第一章 序論
- 第二章 時間に先立つ主体——『純粹理性批判』の時間性
- 第三章 『判断力批判』の時間性
- 第四章 人間の複数性と時間
- 第五章 結論

第四章 人間の複数性と時間

- 『判断力批判』の時間性は構想力の持続と悟性の中斷のリズム
 - 時間が諸能力のリズムとして形成されるならば、そこには多様な配分が、従って多様な時間がありえるはず(時間の複数性)
- 『判断力批判』『人間学』では、逸脱した非規範的な主体が繰り返し描かれる
 - 彼らはどのような時間を生きているのか？

第四章 人間の複数性と時間

- ・「狂人」 | 構想力の異常と共通感覚からの逸脱[VA:219]
 - 構想力の異常は「夜」の夢想を引き起し、昼間の「仕事」を妨げる[VA:180]

夜になると構想力は活発になり自分の実際の真価以上に舞い上がる。(……)夜の静寂の中で本にかじりついている者、あるいはまた夜中に架空の論敵とやりあう者、さらには部屋のなかをあちらこちらしながら頭に空中楼閣を描く者、こうした連中が夢想にふけるのは構想力の仕業である。[VA:180]

- 構想力は時計の時間からの逸脱(前章末尾参照)、労働の時間からの逸脱を引き起こす
→近代社会の前提である「**抽象的時間形態**」(cf. ポストン『時間・労働・支配』)からの逸脱



第四章 人間の複数性と時間

- ・ 「天才」 | 模倣不可能なスタイルによる共通感覚の変革

天才の産物は(この産物では、可能な学びや訓練に帰せられるべきではなく、天才に帰せられるべきものについては)、模倣の実例ではなく(というのも、この場合には、その産物における天才であるものや、作品の精神を形成するものは失われてしまうだろうからである)、むしろほかの天才に対する継承の実例である。他の天才は、これによって自分自身の独創性の感情に目覚めさせられて、諸規則の強制からの自由を芸術のうちに發揮するのであって、芸術はこれによってそれ自身一つの新しい規則を獲得するのであり、この規則によって天才の才能は、模範的なものとして示されるのである。しかし天才は、自然の寵児であって、こうしたものは、稀有の現象とみなされなければならないのであるから、天才の実例は、他の優れた頭脳の持ち主たちに対しては一つの流派を生み出す。言い換えれば、諸規則があの精神の諸産物とその特有性とから引き出されうるかぎり、これら規則に従う方法的指導を生み出す。[KU:318]

- 趣味=現在の他者に対する呼びかけ
- 天才=未来の他者に対する呼びかけ(cf.ドゥルーズ『カントの批判哲学』)

第四章 人間の複数性と時間

- ・『人間学』「構想力によって過去のことや未来のことを現在化する能力について」

しかしどうしてここ[＊占い師たち]に詩人たちまでが加わって、自分たちもまた靈感を受けて(靈感に憑かれて)占っているのだ(vates予言する詩人)と誇り、詩人特有の陶酔状態furor poeticusの中で閃きを受け取るのだと自慢することが可能なのかといえば、それは、詩人というものは(……)ある感覚気分が自分の内面にわいてきたその典型的な瞬間を逃さず捉えなければならないのであり、その瞬間のうちにおのずと生き生きとして力のこもった形像と感情が彼にわいてくるのであって、そこではひたすら受け身に立たされているのだ、という事情からのみ理解できるのである。[VA:188]

- ・詩人の産出的構想力は世界に未来の兆候を勝手に読み込んでいってしまう

➢ 他者としての未来に非-自律的に出会い続ける構想力

→「生産者」としての主体という近代の前提的主体観(cf.福田歓一『近代の政治思想』)に縛られたハイデッガー「脱自的統一態」とは反対の未来とのかかわり

- 第一章 序論
- 第二章 時間に先立つ主体——『純粹理性批判』の時間性
- 第三章 『判断力批判』の時間性
- 第四章 人間の複数性と時間
- 第五章 結論

第五章 結論

地上の人間には知的直観は不可能であり、
必ず感性的諸能力に依存しなければならない

感性をまとめ上げる能力である構想力が開拓する
人間的時間は、時間の主觀的複数性を導く

有限性に根差した『判断力批判』の時間論は、
複数的な主觀的時間の枠組みを提供する

参考文献

〈カントの文献〉

- カント、有福孝岳訳(2001)『カント全集4 純粹理性批判 上』岩波書店
——、有福孝岳訳、有福孝岳・坂部恵・牧野英二編(2003)『カント全集5 純粹理性批判 中』岩波書店
——、有福孝岳・久吳高之訳(2006)『カント全集6 純粹理性批判 下 プロレゴメーナ』岩波書店
——、坂部恵・平田俊博・伊古田理訳(2000)『カント全集7 実践理性批判 人倫の形而上学の基礎づけ』岩波書店
——、牧野英二訳(1999)『カント全集8 判断力批判 上』岩波書店
——、牧野英二訳(2000)『カント全集9 判断力批判 下』岩波書店
——、渋谷治美・高橋克也訳(2003)『カント全集15 人間学』岩波書店

Kant, Immanuel. Kant's gesammelte Schriften. Herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften.

参考文献

〈その他の文献〉

アルマン・ニヴェル、袖林恒道訳(2014)『啓蒙主義の美学——ミメーシスからポエーシスへ』晃洋書房 [Nivelle, Armand. (1977). *Literaturästhetik der europäischen Aufklärung*. AULA-Verlag.]

アレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテン、松尾大訳(2016)『美学』講談社学術文庫 [Baumgarten, Alexander Gottlieb. (1750/1756). *Aesthetica*. G. Olms.]

エルンスト・カッシーラー、中野好之訳(2022)『啓蒙主義の哲学(下)』ちくま学芸文庫 [Cassirer, Ernst. (1932). *Die Philosophie der Aufklärung*. Verlag von J.C.B Mohr]

小田部胤久(2020)『美学』東京大学出版会

木村敏(1982)『時間と自己』中公新書

ジル・ドゥルーズ、國分功一朗訳(2018)『カントの批判哲学』ちくま学芸文庫 [Deleuze, Gilles. (2004, c1963). *La philosophie critique de Kant*. Press Universitaire de France.]

——— 宇野邦一・江川隆男・加賀野井秀一・財津理・鈴木創士・鈴木雅雄・前田英樹;松葉祥一・三脇康生・安島真一訳(2003)『無人島1953-1968』河出書房新社 [Deleuze, Gilles. (2002). *L'Île déserte et autres textes: Textes et entretiens 1955-1974*. Les Editions de minuit.]

参考文献

ジャック・デリダ、湯浅博雄・小森謙一郎訳(2006)『エコノミメーシス』未來社 [Derrida, Jacques, (1975). *Economimesis in Mimesis - des articulations*. Aubier Flammarion.]

高木駿(2020)「醜さとは何か?——『判断力批判』の趣味論に基づいて」『哲学』第七十一号、pp.172-183、日本哲学会

デカルト、伊吹武彦訳(1959)『情念論』角川文庫 [Descartes, Rene. (1909). Adam, Charles et Tannery, Paul. (ed.) *Oeuvres de Descartes. Tome 11.* Vrin.]

長坂真澄(2018)「感性と悟性の共通の根——ハイデガー『カントと形而上学の問題』とカント『判断力批判』の交差点——」『Heidegger-Forum』第十八号、pp.78-94、ハイデガー・フォーラム

中島義道(2016)『カントの時間論』講談社学術文庫

中野裕孝(2021)『カントの自己触発論 行為から始まる知覚』東京大学出版会

永守伸年(2019)『カント 未成熟な人間のための思想——想像力の哲学』慶應義塾大学出版会

参考文献

那須政玄(2012)『闇への論理 カントからシェリングへ』行人社

野尻英一(2022)「構想力と人間:記憶と想像力の政治経済学批判序説(2)」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第四十八号、pp.67-88、大阪大学人間科学研究科

ハインツ・ハイムゼート、須田朗・宮武昭訳(1981)『カント哲学の形成と形而上学的基礎』未來社
[Heimsoeth, Heintz. (1971). Studien zur Philosophie Immanuel Kants. Bouvier.]

浜野喬士(2013)「超感性的なもの、認識一般、根拠:カント『判断力批判』研究」早稲田大学文学学術院博士論文

ハンナ・アーレント、ロベルト・ベイナー編、浜田義文監訳(1987)『カント政治哲学の講義』法政大学出版局 [Arendt, Hannah. (1982). Beiner, Ronald. (ed.) Lectures on Kant's Political Philosophy. University of Chicago Press.]

———、ウルズラ・ルツツ編、佐藤和夫訳(2017)『政治とは何か』岩波書店 [Arendt, Hannah. (1993). Ludz, Ursula. (ed.) WAS IST POLITIK?. Piper Verlag GmbH.]

参考文献

福田歓一(2012)『近代の政治思想』岩波新書

プラトン、今林万里子・田中美知太郎・松永雄二訳(1975)『プラトン全集』岩波書店

ホルクハイマー、アドルノ、徳永恂訳(2022)『啓蒙の弁証法』岩波文庫 [Horkheimer, Max. und Adorno, Theodor W. (1947). DIALEKTIK DER AUFKLÄRUNG Philosophische Fragmente. Querido.]

マルティン・ハイデッガー、木場深定訳(1976)『カントと形而上学の問題』理想社 [Heidegger, Martin. (2010). Kant und das Problem der Metaphysik, Gesamtausgabe Band 3. Klostermann.]

——、細谷貞雄(2022)『存在と時間(上・下)』ちくま学芸文庫 [Heidegger, Martin. (2018). Sein und Zeit, Gesamtausgabe Band 2. Klostermann.]

モイシェ・ポストン、白井聰・野尻英一監訳(2012)『時間・労働・支配——マルクス理論の新地平』筑摩書房 [Postone, Moishe. (1993). Time, Labor, and Social Domination: A Reinterpretation of Marx's Critical Theory. Cambridge University Press.]

参考文献

Baumgarten, Alexander. (2014). Fugate, Courtney D. and Hymers, John. (trans/eds). METAPHYSICS: A Critical Translation with Kant's Elucidations, Selected Notes, and Related Materials. Bloomsbury. [Baumgarten, Alexander Gottlieb. (1757). Metaphysica. Edito iii. Impensis Carol. Herman. Hemmerde.]

Henlich, Dieter. (1992). Aesthetic Judgment and the Moral Image of the World. Stanford University Press.

Mohr, Georg. (1991). Das sinnliche Ich: Innerer Sinn und Bewußtsein bei Kant. Königshausen & Neumann.

Wayne, Michal. (2014). Red Kant: Aesthetics, Marxism, and the Third Critique. Bloomsbury.

*邦訳がある文献については、既存の訳文を使用した。ただし、訳語・表記は適宜修正している。